

地上戦

真珠湾の工機激

昭和

十六年十二月八日

その家から中国との戦争はつづいてい

去征名工を見送りに獲を研うて見送りに行

た「我が大君にゆさ小たる」の歌うたうて見送

った。その時は学校の行事のような感覚だ

た十二月八日の勝（小島）は子艦をから「ドギ

とした。大丈夫なりの相手は米国だのに。その

感はあたり次第に負け戦になり本土空襲とな

つた。毎晩やつて来る。1329焼夷機弾電磁子

の燃焼

のようになおして行った

日本国甲が加印野原に存り、<sup>サキ</sup>日本はどん

どんやけつ行つた

菜園と畑と不で作った家と住り、当時の日本

の空の模型と住りどんくういの焼長弾とや

けつくせまか実験とこてい太と言ふ

東京の下町での二十七年三月十日の空<sup>新</sup>は

実験結果といふれていふ

幸として日本国には空かりの攻撃たつた

神龍は地工場の<sup>預</sup>をば一般国民と兵士を別

に考之非戦死員を対象にありと問題に存すは

代たが当知は国縁なく民間人が逃すも追ひ

か午てうう、くうかくわわろかの一頁の章始

故国縁が

戦後神魂でのこと

あるは哲加の存るといふも悲しげな歌を

う右つていたその理由はこうだ

戦時中防空壕ににがこが兵隊も民間人も

いっしおだるづわのせ性にも供の遺り声か

外にも山ろと米軍に新学すたるまら行けと言

わかれ子供をうけて外へ行き不しげな子供

をすわらせ、最後の食糧の如くこぼさず世に

てけをゆふ、まうとむれえにまうからわし

と言つて隙空<sup>ニ</sup>へもどつた、まもなく半島に

のかがり押辱となり長矢としこやると不のし

げみにたじりつり左膝わさなククとわさな骨

がまうんその膝めう被母は夕牙に存ると悲

しげ存歎をうたつている

地上のいのちの物語だ